

国際医療福祉大学大学院審査学位論文（博士）

2021 年度大学院医療福祉学研究科博士課程・論文要旨

**題目：特別養護老人ホームにおける利用者の尊厳に対する
介護職の意識に関する研究**

保健医療学専攻 先進的ケア・ネットワーク開発研究分野 介護福祉学領域

学籍番号：19S3089 氏名：山下哲司

研究指導教員：小平めぐみ准教授 副研究指導教員：坂田佳美助教

キーワード： 尊厳 意識 介護 特別養護老人ホーム

I.研究の背景と目的

介護の書物や教育研修の中で利用者の「尊厳を尊重する」ように言われているが、尊厳の尊重と正反対といえる「虐待」は依然として多く発生している。そこで、特養の介護職は、利用者の尊厳に対してどのように意識しているかを明らかにすることを本研究の目的とした。

II.方法

本研究は、先行研究、量的研究、質的研究の3つの調査から成り立っている。調査1はオンラインによるレビューを2021年7月から12月に実施し、医中誌26件、Pub Med2件の先行研究を抽出した。調査2は全国235件の特養に対して1施設10名の介護職に郵送法によるアンケート調査を2020年7月5日から8月15日に実施した。統計解析にはIBM SPSS Statistics22を用い、単純集計後差の検定をおこなった。調査3はアンケートから承諾が得られた介護職2名とスノーボールサンプリング6名の計8名にインタビュー調査を2021年8月3日から8月26日に実施した。インタビューを録音し逐語録を作成し、コード化、意味のある言葉でまとめ、サブカテゴリー、カテゴリーを作成した。

III.倫理上の配慮

国際医療福祉大学の倫理審査委員会の倫理審査の承認を受けて実施した(承認番号19-Ig-84-2, 19-Ig-84-3)。

IV.結果

調査1: 先行研究の医中誌26件は、量的研究が17件、質的研究が5件、実践報告が4件であった。研究の年代別では2014年と2018年が各5件と一番多く、研究分野は看護が22件と最も多かった。Pub Med2件は、質的研究が2件で、研究の発表年の年代は2013年と2015年であった。

調査2: 介護職217名(回収率9.2%)から回答を得た。利用者の尊厳に影響しやすいADLは排泄介助が94.9%と最も多かった。また利用者の尊厳を常に大切に介護しているという意識の介護職は32.3%と少数であった。

調査3: 8名に対して平均20分のインタビューを実施した。サブカテゴリー35、カテゴリ12が抽出された。介護職は利用者の尊厳を尊重する意識として、【一般の人と同じ扱い】をする、【やりたい事を叶えること】【その人らしさ】を大切にする、家族の要望よりも【本人の要望が一番】だと考えていた。利用者の尊厳を尊重できていない意識として、【100%は満たせない要望】へのジレンマを感じており、【介護職の好ましくない言動】や【介護職の主観的な考え方】による介護職本位のケアの意識が語られていた。

V. 考察

尊厳の概念は、第二次世界大戦後に「国連憲章」・「世界人権宣言」から「日本国憲法」・「ドイツ連邦共和国基本法」と 1940 年代後半から個人の尊厳の認識の高まりが始まっていた。ミヒャエル・クラヴァンテ(2015) は¹⁾、自己決定の権利および人間の尊厳が自律の思想と密接に結びついているとして、自己決定が人間の尊厳に大きくかかわっていることが西洋思想と日本思想における尊厳への意識の違いに関与していると述べている。そのため介護教育で具体的な指導が難しいと考えられ、利用者の尊厳に対する意識の高い介護職は少数であった。

介護職は、利用者の尊厳を意識したケアとして、【一般の人と同じ扱い】をすること、【やりたい事を叶えること】、【その人らしさ】を大切にすること、家族の要望よりも【本人の要望が一番】であると考えていた。黒澤(2013)は²⁾、介護過程において、人間としての尊厳の保持・回復を、直接の介護サービス(ケアプラン)の目標とするのではない。人間の「尊厳」は、あくまで理念として掲げられるものだからである、と述べている。理念は掲げるが利用者の尊厳の保持や回復を介護サービス(ケアプラン)の目標としなくてもよいということは、知識や概念は持っているべきだが、実際のケアにおいて尊厳を意識しなくてもよいと理解できる。また人は食事をするとき、一口ごとに何を食べるか自分で決めて食べているはずであるが、利用者の食事は一口ごとに何を食べるか確認することが尊厳を大切にすることかについて「少し思う」(51.6%)が多いことは、介護職自身の食事と利用者の食事を別のものと考えていた。多数の介護職は【一般の人と同じ扱い】をして【その人らしさ】を大切にするという利用者の尊厳に対する意識が低いことが示唆された。

VI. 結語

①個人の尊厳は、第二次世界大戦終結から認識が高まり、当初は生命の尊厳が注目されていたが、西洋思想に基づく看護を中心に、高齢社会への移行とともにケアの分野において高齢者の尊厳、人の尊厳の調査研究が始まり現在に至っていた。「主に自己決定が人間の尊厳という西洋思想」と「主に人間らしさが人間の尊厳という日本思想」と尊厳に対する認識の違いから、尊厳のとらえ方が統一されておらず尊厳の中身の理解が一般的に普及していないことから、介護職の尊厳に対する意識は低いと捉えられた。

②利用者の尊厳を大切に介護する意識の高い特養の介護職は全体の 32.3%と少数であった。

③介護職は利用者の尊厳を尊重することとして、【一般の人と同じ扱い】をすることや、【やりたい事を叶えること】や【その人らしさ】を大切にすること、家族の要望よりも【本人の要望が一番】だと意識していた。一方利用者の尊厳を尊重できていないことについて、【介護職の好ましくない言動】や【介護職の主観的な考え方】によってケアが提供されている点、排せつや着替えなど【プライバシーを大切にすべき】という点などが意識されていた。

医療における生命の尊厳からケア分野における高齢者の尊厳に対する認識の歴史は浅く、西洋思想と日本思想の尊厳に対する認識の違いから、ケア分野で理解が進んでおらず、特養の利用者の尊厳に対して意識の高い介護職は少数であることが明らかとなった。

VIII. 引用文献

- 1) ミヒャエル・クヴァンテ(加藤泰史ら訳). 人間の尊厳と人格の自律. 第 1 版、東京:一般社団法人法政大学出版局, 2015:224
- 2) 黒澤貞夫. 介護福祉士養成テキスト 1 人間の尊厳と自立. 5.9. 株式会社建帛社. 2013